HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	発達の根源への問い
Author(s)	佐藤, 公治; SATO, Kimiharu
Citation	子ども発達臨床研究, 1, 27-37
Issue Date	2007-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/20560
Type	departmental bulletin paper
File Information	SATOU.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

発達の根源への問い

佐　藤　公　治

An inquiry for the foundation and the origin of the human development as a developmental research task

Kimiharu SATO

要　　旨

人間精神の活動を支え、それと深く関わっているものとして身体と情動が位置づいていることが再認識され始めている。しかし、人間精神と人間発達の根幹に位置する身体に根ざした経験や活動が記号化社会の加速化の中で縮小が進んでいる。本論では、今日のIT社会のなかで改めて発達の根源にあるものは何であるかをメルロ＝ポンティ、ヴィゴツキーなどの発達の基礎理論から再検討することの必要性を論じた。

キーワード：発達の根源、生成の現象学、スピノザ、メルロ＝ポンティ、ヴィゴツキー

1．人間精神の根源にある身体と身体経験の縮小化

人間社会は今、急速な情報化社会を加速させている。この電子情報というのは、ある意味ではこれまでの人間が持ってきた人間特有の環境(「環世界」)の中でも抽象性が高く、かつ限りなく記号化されたものに依存しているという点ではきわめて偏りがある。このような急速なIT化は人間の発達と成長にこれまでの時代とは違った環境的意味を与えているに違いない。特に、本稿で問題にしたいのは、人間の発達の根源にある身体と身体的経験がIT化によってどのような変化を受け、それがどのような形をとって顕われているかということである。

いくつかの現象例を挙げてみよう。全日本農協連合会の「朝ごはん実行委員会」が2005年2月に東京首都圏の小学5、6年生の男女約300名に朝食の様子を絵に描いてもらったところ、人物を♀マークや文字で簡略化して描いてしまって、具体的な人物の表情が描かれていないのが40%であった。また食事の風景に人物が登場しないといったものを含めると半数以上が人物に表情が描かれていない絵であった(出典、JA朝ごはん実行委員会ニュース、ニュースレターNo. 15、及び朝日新聞2006年8月22日朝刊)。この調査結果の分析を担当した聖徳大学教授・室田洋子は「家族がごはんをたべている様子」を子どもたちがどのように描くかという今回と同じ調査を95年から継続して行ってきており、2003年にも人物をマークに描くのが29%程度あったが、今回の2005年の調査ではそれが40%と急増している。この結果については家族とのつながりが希薄になったことが原因であるという解釈もあるが、子どもたちの世界

の表現方法や表象のモードがきわめて形式化された記号様式で処理するようになってしまい、特に人物に対してそれが顕著で、一人ひとりの個性を消してまるで人一般として表現することで済ますことが支配的になろうとしていることの表れと言うことができる。

これら子どもたちの描画の事例では、もちろん子どもたちが人物を♀のマークのように見ているわけでは決してない。というのは、人の視覚システムは時空間的に安定しており、人間が作り出す世界秩序のための基礎となっている。要は、子どもたちが人物をこのようなマークや文字によって表現することをはじめてしまうと、この表現されたものが人間の表象体系を形成し始めるのである。メルロ＝ポンティ（Merleau-Ponty, M., 1960）は「思考はすべて言葉（パロール）からやってきて、言葉（パロール）へと帰る。言葉（パロール）はすべて思考のなかに生まれ、思考のなかに終わる」（「間接的言語と沈黙の声」邦訳 p 23、シーニュ１所収）と述べている。思考と言葉（パロール）の関係とはこのようなものである。思考は言葉（パロール）を生み出し、言葉（パロール）は思考を前進させる。言葉（パロール）は言語に限定しなくてもよい。ここで問題にしているような描画も個人の表現手段という意味ではパロールと同じである。パロールだけが一人歩きするわけではなく絶えず思考と支え合い、もたれ合いの弁証法的関係として存在するのだが、同時にパロールが思考を方向づける、世界を表象する「枠組み」となって作用してもいるのであり、問題にしなければならないのはこの部分である。

先の描画の場合は、子どもは目の前の現象を自分なりに工夫してそれを具体的に表現する方法やその場の状況をとらえるための工夫といったことを省略してしまっている。そこには親や大人の使っているメルロ＝ポンティ（1945）の言う「規約に基づく記号」、ラングとしての言語の過剰な使用、悪しき使用の弊害とでも言えるような現象となって現れているといえよう。子どもは大人の使用するような制度化された言語体系であるラングの世界に入る前にパロールの世界や「自然的な言語」の世界、身振りや身体に根ざしたしぐさといつたことばの前のことばの経験を豊かに持っている必要がある。それらの体験を積まずにいきなり抽象的なラングの言語世界に入ってしまうと本来のことばの内実を身につけることなく自分の意味を表現することばとしての力を得ることができなくなってしまう。

ヴィゴツキーの言を待つまでもなく、人間の発達にとってことば、中でも抽象的な思考を支える概念と言語は不可欠なものである。個別、具体の経験や状況の制約を超えて人間は抽象化が可能になり、自分の限られた経験を超えて普遍の世界でものごとを考えることが可能になる。しかし、このことが可能になるためにはその始まりの時点で、きわめて個別、具体的なできごととの遭遇や、それらを概念以前の段階でとらえること、つまり、身体で感じ、あるいは知覚する、運動としてとらえること、それらのくり返しから生まれるイメージといったことがなければならない。そこにもう一つの世界の表現と世界の秩序把握の方法であることばというものが付け加わることで人間特有の世界表現の秩序が生成されてくる。

以上のことは、人間の発達の根源にあるものとしてことば以前の経験を位置づけた現象学者・メルロ＝ポンティが「行動の構造」（1942）で言わんとしたことでもある。そうであるならば、人間精神と人間発達の根源に位置づき、人間精神の立ち上がりの部分に直接関わりを持っている身体的経験が少なくなり、抽象的な記号情報に向かうようなことが多くなってしまうことは人間精神の本質を揺るがしかねない大きな問題なのである。そこにはことばをめぐって家庭における本来の親のこどもへの関わり方の問題も関係してくるだろう。

以下は、札幌近郊のある小学校で行われている母親学級で、低学年の子どもの母親が子どもとの接し方で悩みを打ち明けた事例である。この母親は自分の子どもが幼児のように抱きついてきたことに身体的に嫌悪感を感じ、無意識的に子どもを拒絶し、子どもをはね除けてしまった。小学校に

入ったような子どもにもはやこのような身体的な接触を求めてくることにどこかで受け入れることができない自分がいたのだろう。しかし、この母親はこういう振る舞いを子どもにしてしまったことに逆に強い嫌悪感を自分に持ってしまい、親子関係の悩みを感じることになる。小学校の時期、ましてや低学年の子どもにとって人との関係はもっと情緒的なものに根ざしたものを残しているはずだ。しかし、親は子どもとの関係についても先の「自然的な記号」よりも「規約に基づく記号」で関わろうとして先を急ぎすぎてしまっているのではないだろうか。

ノンフィクション作家として知られる柳田邦男は、日本社会全体がIT化する中で大人も子どもも急速に抽象化された記号としてできごとを感じとってしまい、そこに身体感覚や、リアルな体験が欠乏したきわめてとぼしい想像性しか存在しなくなってしまっていると言う(柳田、2006)。そのような中で、今、求められていることは子どもたちが自分の体験世界とそれを社会的に共有可能なラングとしてのことばで表現していくものとの間を橋渡しする役目を持っている自分の体験や想像に裏打ちされたことば＝パロールを豊かにすることである。このパロールはメルロ＝ポンティ(1945)が「自然的な記号」と呼んで身振りや情緒的なしぐさといった人間の意志の伝達の最も原初に位置づいているものを基にしているもので、そこからさらに進んでことばの象徴的な機能や記号的な特性を付け加え、個人の意味世界や体験をことばでもって表現したものである。このような「自然的な記号」からパロールとしてのことばである「日常の使用における言語」へと成長させていくためには、記号を支える個人の象徴機能としての想像力を豊かに持つことが必要であり、それはまさに人間を人間たらしめるところのメルロ＝ポンティ(1942)が言う「人間的秩序」、つまり人間が世界を表現し、把握していくための最も基本となる枠組みであり、人間の認識の枠組みの基本となっているものである。この想像力を育てるために何が必要になるかというと、幼児期に絵本を読むことであり、親や保育者から絵本を読んでもらうことである。そして自分の想像世界を広げていくことである。絵本や物語を読むことは自分の中に想像世界を作り、言語による思考力や表現力を発達させるためには決定的に重要な活動である。柳田(2006)は、この経験が今の子どもたちは余りにも足りないと言う。親もケータイ、インターネット社会に浸りきっているからその子どもにじっくり絵本を読んで聞かせるような余裕や絵本の面白さ、大切さを知らなくなっている。このような現状の中で柳田は各地で始まっている絵本読み聞かせ運動や児童図書館作り、読書塾の運動の広がりの大切さを強調する。

2．人間精神の根源としての身体

演劇の経験から身体やことばによる表現の実践、これらに関わる本質的な問題について数多くの提言をしている竹内敏晴の根本にあるものは身体に根ざしたことばである。これをメルロ＝ポンティ(1945)は「「自然的な記号」と言い、竹内(2007)は「第一次言語」と言う。実は竹内は、子どもの時に耳の病のためにこの「第一次言語」を身につけることができなく、そのために長い間、次の「規約に基づく記号」、「第二次言語」(竹内、2007))を獲得することに多大の支障をきたしてきた。そのことを身をもって体験したことが、通常の人間には分からない身体への気づきと身体とことばとをつなげた竹内のレッスンの技法の確立に与っている。しかし、そこには他人には計り知れない多くの苦労があったことは彼の多くの著書からも分かるのだが、特に竹内(2007)がこの新しい著書で述べていることで注目したいのは、彼がメルロ＝ポンティの思想に大きな影響を受けている点である。

メルロ＝ポンティ(1945)の「知覚の現象学」の第1部の最後に「表現としての身体と言葉」の節がある。ここで書かれていることは後の中期の言語研究にもつながっていくものでもあるが、同じ時期に書かれた「行動の構造」の中でも展開さ

れている人間精神の根源とは何であるかという彼が生涯追い求めた問題への彼なりの基本的な解答が既に提出されているという点ではきわめて重要な節である。竹内（2007）が強く衝撃を受けたのもやはり、人間のことばによる表現の根源にあるものは何か、それは身体であり、声であるとメルロ＝ポンティが明言した点であった。メルロ＝ポンティは身振りが相互の理解の始まりであると言う。「わたしが他者を理解するのはわたしの身体によってである。……身振りとその意味に共通なもの、たとえば情緒の表現とその情緒に共通なものはすぐに理解できる。ほほ笑み、和らいだ顔、軽やかな身のこなし、これらは現実の動作のリズムを含むものであり、世界における存在のありかたを含む ── これはその主体の喜びそのものを示すものである。」（メルロ＝ポンティ、邦訳 p 31-33）。だから「わたしは叫び声のように短く、一体となった行為のうちに、言葉の意味を把握する」（同上邦訳 p 32）ことになる。身振りは感覚的な世界に依拠しており、そして次に続く「規約に基づく記号」の世界はこの「自然の記号」によって「既に獲得された意味という鍵盤の上で変奏する仕方」（同上邦訳 p 32）なのである。

竹内（2007）は声によることばかけ、それは呼びかけであり呼び出しであり、このことばによって自分も生まれてくると言う。なぜならば「ことばは表現であり」、この「表現としてのことば」が次には自分の思想を作り出し、自分というものを形あるものにするからである。このことばが生み出されていく現場は人と人、親と子の直接的な声による交わりの場からまず始まる。竹内のことばのレッスンではことばの起源に戻る。つまり、身体であり、声への気づきであり、これらを通した他者との関わりである間主観性 ── 間身体性 ── から結局は自己を発見していくことになる。これがことばのレッスンである。このレッスンはまさに人間のことばの生成過程のたどり直しそのものであり、メルロ＝ポンティの思想そのものでもある。そして、人の発達と成長、特にその中でもその中核に位置づいていることばの生成にとって何が必要であるか、そして今、そのことばが大人にとっても子どもにとっても「難しい」時期に来ていることをこの「レッスン」の多くの実践例は教えてくれる。

3．人間精神における身体と情動の見直し：「認知論的転回」から「情動論的転回」へ

⑴　人間精神における身体の位置づけ

現象学者のメルロ＝ポンティは、人間精神の本質を見極めようとして、心理学をはじめとする人間諸科学で取られてきた主知主義と、それとは異なった考え方である経験論的な認識や人間観のいずれに対しても異議を唱える。これらは近代理性主義の伝統に則った主知主義であり、自然科学に基づく発想である点では共通している。そしてこれら二つの立場からの人間理解の仕方で共通しているのは、人間精神や人間の行為を環境との関わりで考えようという視点の希薄さである。デカルトやカントに代表される超越論的認識論はたしかに世界の認識把握という形で外部世界と関わっている。しかし、それはあくまでも認識の対象としての外的対象であり、ノエシス－ノエマの連関も認識の世界でのことである。他方、経験論となると、環境からの行動統制に支配されてその中で受けた経験によって人間精神を説明してしまったり、あるいは自然科学から借りた経験主義的方法の無批判的な使用を人間精神にも適用してしまうことが行われた。そこでは、人間が主体的にその人間にとって意味のある環境、ユクスキュル（Uexküll）の言う「環世界（Umwelt）」と積極的に関わる中で人間世界としての秩序、つまり意味を作り出していくという発想はない。経験論はさらに人間理解にあたってしばしば生物学的あるいは生理学的なものに還元してしまい、それらに原因を一元的に帰属させてしまっている。そして、この主知主義、経験論の二つがいずれも人間理解の際に欠落させ、また自らの学問世界の構築において位置づけることに失敗してきたのが「身体」である。そしてこの「身体」も決して客観的な分

析対象としての身体ではなく、自己の環境と関わる主体の行為や意志、情動の具体的な体現としての身体であり、人間精神の具体性の単位として位置づけられるべきものである。メルロ＝ポンティは彼の代表作であり、「行動の構造」と共に学位論文として世に問うた初めての著書である「知覚の現象学」では、身体は客体であると同時に主体でもあると位置づける。「知覚の現象学」の第１部・身体では、これまで身体があくまでも意識によって操作される対象としてモノとして扱われてきた「常識」を否定し、身体と身体による活動・行為によって我々の意識や心が作り出されてくることを明らかにする。だから身体は主体である。もちろん、そこに身体と関わる意志を持った個としての主体が存在しており、その意味では身体は客体でもある。だから身体は客体と主体という両義的な存在としてある。そしてこの身体でもある主体が行為として展開するときに意味が生まれてくる。私の延長としての身体と物＝道具が主体の意味の生成に強く関わっている。

メルロ＝ポンティは、身体と共にたえず自分が生活し、生きている自分の環境と積極的に関わり続ける者としての人間と人間精神、それらがどのように始まり、生成されていくかその生成の過程からとらえていくことで、これまでの「常識」となったいくつかの考え方に支配されるのではなく、またそこからの予見を持つことなく人間の根源にあるもの、人間精神の本質を見極めようとした。

4 半世紀前の認知科学という新しい学際研究の登場は心理学を始めとする人間諸科学の分野で人間の知性の解明に向けて大きな刺激を与えてきた。その延長で今日の脳科学の研究の隆盛もあると言ってよいだろう。脳科学も人間の「知」の中枢である「高次脳」や「知能」を担う「脳機能」の解明に特化している。しかし、認知科学の研究もその進展の中で人間理解をめぐっていくつかの反省と課題が見えてきた。例えば、人間の認識をコンピュータとのアナロジーでとらえる情報処理的アプローチの限界と人間の認識系の特殊性が明らかになっている。少し前から人間の認識系の場合は状況や文脈に依存したり、規制を受けることが多いという「認知の状況論」が言われるようになり、認識は社会・文化的諸変数の問題でもあるという問いの立て方が必要であることが求められるようになった。それは心理学以外の分野でも考えられ始めており、例えば、ロボット研究では環境との接面、インターフェースで起きていることの問題が否応なく突きつけられているのは承知のことである。また、人の場合は身体を持っていることが何よりもコンピュータとの決定的な違いである。そして、今、身体や情動への関心が高まっている（Damasio, 1996, 1999; LeDoux, 1996, 2002）。

先に述べたように、メルロ＝ポンティは「行動の構造」で人間をその人間の生きている場である環世界の中でそれらと絶えず関わる主体として生きる行為者としてとらえる視点が真の人間研究として必要であることを提唱した。行為者として外部と関わる視点は当然のことながら身体を位置づけることになるが、それはあくまでも行為するための身体であって脳という物理的な物質ではない。例えば「行動の構造」ではメルロ＝ポンティは、人間の世界をとらえる基本的枠組みとして知覚世界の秩序形成、ゲシュタルトを位置づけているが、彼はゲシュタルト心理学が犯した過ちとして、このゲシュタルトの説明を心身物理同型論で大脳のメカニズムに帰したことは本来のゲシュタルト心理学の思想とは異なった方向に向かってしまったと言う。ゲシュタルトは一つの現象学的接近であるべきだったというのが彼の主張である。

ダマシオ（Damasio, A. R., 1996, 1999）はこれまでもっぱら人間の精神を脳に極限させてきた発想から抜け出て、身体や情動の持っている役割に光を当てることに貢献した神経学者として知られている。彼が提唱した「ソマティック・マーカー仮説（somatic marker hypothesis）」は彼の脳損傷患者の神経活動についての研究をもとにして人間の意思決定にあずかっているのは大脳皮質の高次脳の部分や認知機能に関わる部位だけではな

く、身体や情動系も強く関与しており、認知と情動の相互作用の問題を改めて検討することが必要であると主張した。そして彼は身体こそが心の中核に位置づくものとして、これまでの人間諸科学の中で身体を軽視してきた傾向を批判する。

ダマシオの言う「ソマティック•マーカー」は、一言で言えば、特定の行動によって生じてしまうかもしれないネガティブな結果に対して信号としてわれわれの注意をそこに向けさせるマーカーである。このソマティックということばが意味するようにこれは身体レベルでとらえられるものである。これまでの認知心理学や情報理論では、人間の意思決定過程はたくさんある選択肢の中から一つを合理的に検討して決定していくといったきわめて理性的な処理のモデルを考えてきた。だが、私たちは日常生活でそのようなことをやっているだろうか。そもそも可能な選択肢はあまりにも多すぎるのではないだろうか。しかもその選択は限られた時間の中で行われなければならないことの方が圧倒的に多い。そうなると私たちはまさに直観的に、「この種のことは前に失敗したから止めておこう」という身体的、情動レベルの反応が賦活してきて、少なくともこの選択を止める。これが「ソマティック•マーカー」である。これは前頭前皮質に記憶されてその都度瞬時に引き出され、また経験によって強固になっていく。合理的な思考はその後で働き、このような選択をしたことを言葉で説明したり、自分に言い聞かせる。

ダマシオの考える人間の意識は人間の意志や注意の喚起といったいわば生存と適応のために機能する情動-認知系としての統合されたシステムであり、そこには情動や感情、あるいは身体的な感覚といったものも伴っている。そしてこの「ソマティック・マーカー」は人間の意思決定にあずかる注意の問題を身体レベルでもう一度捉え直したものである。これまで注意という概念は認知心理学や知覚心理学の流れの中では認知や知覚に寄りかかったいわば情報処理過程の中の情報選択という意味あいが強かった。しかし、ここで言う注意の概念は人間の意思や志向といった活動、あるいはある対象に向かって出された意識の方向やその強さといった人間の精神活動の基本に位置するものを指す概念となっている。そしてこのような注意の概念を心理学の中に位置づけていたのがこの後でみるジェームズであり、彼の意識論であったことはもう一度確認しておく必要がある。

ダマシオは自分のアイデアの源流はデカルトに代表される主知主義と対極にあったスピノザであると言う。特にダマシオ（2003）では、彼の理論の出発点ともなったフィネアス・ゲージとダマシオ自身の精神疾患患者の多くが前頭前・腹側内側領域の損傷を受けることで生じた精神の問題、人間精神の根本をどう考えるべきかという問いの答えをスピノザの思想に求めたものである。神経学者が人間理解のための視座を具体的な活動にこだわったスピノザの思想に求めたことはきわめて示唆的である。そしてダマシオ（2003）は、スピノザと共に人間の意識を追究した希有の研究者としてジェームズを取り上げ、スピノザとの共通性、相違点も検討している。

⑵　ジェームズの意識論

ジェームズ（James, W.）はトータルな人間把握を目指した心理学者であったが、結局、当時の要素主義心理学では人間理解は不可能であると考え、心理学を捨てて哲学や宗教学に向かった。彼は人間把握のためには意識を問題にすることが必要であるが、心理学ではこの問題をまともに扱っていないし、哲学では間違った論じられ方をしてきたと言う。彼の意識論は基本的には反実体論で、常識的に取られてきた意識そのものが実体（substance）として存在するといった考え方を否定する。その点では、彼の意識論はダマシオやこの後にみるスピノザ、次節で検討するヴィゴツキーの意識論と共通している。彼の意識論については「意識は存在するのか」（1904）という論文でやや詳しく知ることが出来るが、その要点を先に述べるならば、意識は外部の対象に対して我々が取る具体的な実践的な行為、機能（function）としてそれは展開されるものであって、決して意識それ自体が

単独で存在したり、その素材があるというように考えてはならないというものである。以下の文章は彼が意識することを思考や認識を例に上げて述べたものであるが、ここには彼の意識論の考えがよく示されている。「わたしは意識という言葉はある機能を表しているということを強調したい。……われわれの思考をつくっているとされる原初的な素材とか存在の質などは存在せず、ただ経験のなかにあって思考がはたす機能というものがあり、この機能の作用ゆえにこうした存在の質といったものが措定されることになったということである。この機能とは認識するということである。」（邦訳 p 11）。だから彼は、「意識とは一種の外的な関係を意味する言葉であり、特殊な素材や存在の仕方を指示する言葉ではない」（邦訳 p 31）。という考えに行き着くことになる。

意識とはあくまでも具体的な人間の行為によって生じてくる精神活動そのものであり、われわれが経験として感じる「あれ」である、とジェームズは言う。この単純なる「あれ」としか表現できないものを彼は他のところでも用いているが、これは彼が「純粋経験（pure experience）」と呼んでいるものであった。主体が自分の身体を使って外の世界と関わり、感じているこの今というアクチュアルな活動と単純に「あの経験」としか言い表せないもの、これが純粋経験であり、これこそが人の意識状態を特徴づける根本にあるものだとジェームズが考えた。先に述べたようにジェームズは常に心の要素主義、原子論に対して批判を続け、意識を連続的、トータルに把握することが人間理解には不可欠であると一貫して主張してきた。そして彼の意識論は精神と物質、あるいは心と身体を二分法的に扱う心身分離論ではなく両者を弁証法的関係として捉えるという意味では、あくまでも人間を具体性のレベルから考える「生の実感」に根ざしたものでもあった。

彼の「意識は存在するのか」という論文の最後には以下のような文章が出てくる。「これまでつねに精神（spirit）の語源であったところの気息、すなわち声門と鼻を通って外へと出ていく気息こそが、わたしの確信するところでは、哲学者たちによって意識として認識される存在者を構成するものとして措定されてきた、あの本質の正体なのである。」（邦訳 p 44）。

竹内（2007）が「ことばのレッスン」で強調していることは自分の身体を使って息を出すことであり、それが声を出すための第一歩になっているということである。ことばが拓かれていくことは自分の身体への気付きであり、自己の開放でもある。それはきわめて具体的な身体に根ざした体験であり、身体としての実感を伴ったものでもある。これはジェームズが「純粋経験」と言っていたものでもある。

ジェームズは「純粋経験の世界における感情的事実の位置」（1905）の論文で、人間を精神的なものと物理的のどちらかに分けてしまうことは出来ないことを身体を例にして次のように論じている。「われわれの身体はそれ自体が両義的なものの格好の例である。わたしは時として自分の身体を純粋に外的な自然の一部として扱う。また、わたしは時としてそれを自分のものとして、わたしとともに分類し、その局所的な変化や限定を精神的な出来事として了解する。身体の気息運動はわたしの思考していることであり、その感覚的な調整はわたしの注意作用であり、その運動体感的な変化はわたしの努力感であり、その内臓の動揺はわたしの情念である。」（邦訳 p 159）。

⑶ スピノザのコナトゥスと人間の意思

先に述べたように、これまでの注意は認知や知覚に寄りかかったいわば情報処理過程の中の情報選択という意味あいが強い。その傾向は依然として心理学の中にはある。しかし、この注意という側面は人間の意思や志向という活動と強く関係している。スピノザの理論の中でも「コナトゥス（conatus）」は人間の発達の意味を考える上できわめて参考になる概念である。スピノザは今、自分が生きていること、そして生きていこうとする自己保存の努力に向かって活動すること、それが人間の本性であると考えた。この今、生きている

ということ、これからも生きていこうとする活動や生命が「コナトゥス」である。浅野（2006）はとかく難解で、これまで数多くあるスピノザ論では見えにくいスピノザの人間把握について、特に人間の意思と活動、そして身体や情動論について一つの視点を提示している。浅野はスピノザは徹底的に現状肯定であると言う。それは同時に今を生きているという現在性、アクチュアルな活動からものごとを考えていこうという視点でもある。だからスピノザの意識論は先のジェームズと同じように反実体論で、様態論（attribute）の立場である。つまり、意識というのは意識として活動すること、「現働化（actualize）」する過程のことであると考える。スピノザが身体に注目をしたのは、物理的な存在としてのそれではなく、自己の生を作り出していくものとしての日々の具体的な活動を実現するものとしてのそれであり、行為なのである。そしてその目的は浅野の表現を借りるならば人間が生きていくことであり、「喜び」であり、そういう意味での「情動」を感じることなのである。このようなスピノザの発想は次のヴィゴツキーの行為論や意識論、さらには情動論にも大きな影響を与えていったが、人間とは何か、発達とは何かという問いへの答えがここにある。

⑷　ヴィゴツキーの意識論

意識の問題はヴィゴツキーが人間精神をトータルに扱うために提示した重要な概念である。いわば、意識の解明こそがヴィゴツキーが生涯をかけて取り組んだ研究テーマであったとも言えるだろうし、彼の思想を理解する時にも意識の問題は重要なポイントになっている。ヴィゴツキーは人間の意識は行為によって作られると考える。そして、人間の意識は決して要素に分解してしまっては捉えることができないものであり、トータルに捉えること、そして活動の過程として捉えなければその本質は全く明らかにならないと言う。ヴィゴツキーの意識論もスピノザの考えを基にした反実体論である。ヴィゴツキーは考える活動それ自体が考えることであるという立場で意識を説明している。まさに、スピノザと同じように意識は活動する「こと」そのもの、「現働化」の過程の中から生まれてくると考えた。このように、ヴィゴツキーは意識を主知主義的な実体論や、脳の生理学的振る舞い、単純な行動の連鎖による行動主義的な経験論による説明ではない新たな説明原理を打ち立てようとしたのである。このように、意識を構成しているのはあくまでも実践的な行為であるというのがヴィゴツキーの主張であり、ここで示されているように彼が人間精神を行為という視点から捉えるのも意識の解明という大きな研究主題と不可分に結びついている。

ヴィゴツキーは「思考と言語」の最終章・思想と言葉の終わりの部分で次のように述べている。「思考とことばは、人間の意識の本性を理解する鍵である」（邦訳 p 433）。言葉は思考、さらには意識全体にとっても中心的な役割を果たしているが、結局、ヴィゴツキーが「思考と言語」の中で解きたかった最終目的というのはこの人間の意識の解明にあったと言えるだろう。彼の結びの言葉である。「言葉は、意識の小宇宙である。意味づけられた言葉は、人間の意識の小宇宙である。」（邦訳 p 433）。

ヴィゴツキーは心理学が人間の心を要素に分解しないで、「統一体」として姿を描くことをもう一度目指すべきであると言う。そして、同時に彼は研究の後半になると具体的な社会の中で生きている人間の生活に注目していくようになる。それが「ドラマ」という概念であり、その概要が生前発表されることのなかった論文、「人間の具体性心理学（Concrete human psychology）」（1929/1986）の中で述べられている。現実の生活の中では、人は社会の中で様々な矛盾を抱えながら生きている。その人格のリアルなレベルまで降りて研究すること、これが、ヴィゴツキーが目指した分析のユニットとしての心理学の研究であり、意識の研究としての心理学が目指すべきことであったということである。

4．基礎としての発達研究の課題

ヴィゴツキーの理論を称して人間精神を文化・歴史的文脈の中で論じたものであるという言い方がされる時がある。たしかに、彼は人間の精神活動を具体的な社会・文化、その歴史的な諸変数との弁証法的関係の中で扱うことを基本的な課題とした。だが、このようなアプローチを通して彼が明らかにしたかったことは人間の意識の解明であり、それを発達という生成の時間を入れることで明らかにすることであった。だから彼の生涯の研究テーマは先の節で見たように意識の解明であり、しかもスピノザに限りなく影響を受けた身体と行為論にもとづいた様態論に立った意識論である。ヴィゴツキーはこの意識としての人間の実践的行為を具体化するためにことばと思考に注目した。このことばはまずは、メルロ＝ポンティや竹内敏晴が問題にしたパロールとしてのことばであり、その連続としてラングや概念、その発達であった。そして、ヴィゴツキーは個人の人格、意識世界を問題にする。発達のベクトルとしては社会から個人へと向かう方向を描いた。精神間カテゴリーから精神内カテゴリーへの移行という言い方、そして内化の概念はまさに発達研究者としてのヴィゴツキーが発達の着地点を自己の発達に置いたことを物語っている。もちろん、この個人の中には社会の変数が入っている。このことを浜田(2002) は次のように正しく指摘する。「一見『私』というところに閉じているように見える世界にも、ことばを介して人間の歴史性がしみ込んでいる。そういうものとして意識をとらえるところにヴィゴツキーの本領があると言ってよい。」(p 319)。ヴィゴツキー、メルロ＝ポンティいずれも具体性のレベルで発達の立ち上がり、生成の過程にこだわっている。そこで扱っているのは関係の中で展開されている個別具体の人間の行為である。だがここで扱っている「私」は決して個人の「私」ではない。あるいは自己でありながら非自己を内包したものである。

木村（2006）は檜垣との対談の中で、「あいだ」という関係性の場面においてははじめは自己と非自己である他者とは一人称と二人称として立ち現れるが、お互いの行為的関わり、つまりノエシス的なものは区別がつかなくなり一つのメタノエシスとなっていくと言う。つまり、自他関係の中での水平的自己と時間的パースペクティブを含んだ他者を取り込んだ自己についての垂直的な自己という二つの自己を我々は生きているというのである。そしてこの垂直的自己は決して個人的な「私」としての自己ではない。また、木村（2005）は、我々は個としての主体性だけを考えるならば生命の連続性はその人間の死という時間的な限定の中でしかあり得ないことになるが、集団として、あるいは種として考えると生命の連続性は個を越えたものとして存在している。先の垂直的自己と関わりながら我々は個の主体性というものと個を越えた存在としての種の主体性、集団的主体性という側面を持ちながら生きていると言う。この指摘はヴィゴツキーの社会・文化、その歴史を背景に持った個という発想そのものでもある。

ヴィゴツキーは人間の意識というのは、歴史の流れの中で今この世に生きて活動している人たちの営み、その生の喜び、悲しみである。それをドラマと言った。あるいはそれが情動である。ヴィゴツキーがスピノザから学んだのもあの「コナトゥス」の概念であったはずだ。そうなると自己の問題、その発達を改めて問題にしなければならなくなる。もちろん、従来のものとは違ったアプローチが必要であることは言うまでもない。そうなるとかってスターン（Stern, D. N., 1985）が自己の世界の成立と障害を乳児の世界から追跡していった仕事ももう一度考えてみる必要があるだろう。あるいはビオン（Wilfred Bion）の仕事も何かの示唆を与えてくれるかもしれない。

自閉症ないしはアスペルガーの発達論を考えた時、彼らは外部との身体レベルでの関わり方や身体レベルでの行為系―イメージ（知覚）系―言語系の連関が幾分異なった形で形成されたとみる視点で考えてみることもできるかもしれない(河本、2006)。木村は檜垣との対談（木村・檜垣、2006）

の中で、自閉症児の発達に関して、個別の行為体験にこだわりを持つあまりに個別の行為的関わり（ノエシス）を共同的、歴史的なものへと押し上げていくメタノエシスが特異な形で生じているのではないかと言う。自閉症ないしアスペルガーはメタノエシスの形成における「つまずき」とみることができるかもしれない。そこではメルロ＝ポンティが「知覚の現象学」で問題にしたように、表現系としての身体への帰属とそこだけに収斂しないで身体とは蝶番のような関係になっている言葉（パロール）と規約に基づいた言語（ラング）へと向かう発達の過程の中でみられる自閉症やアスペルガーの子どもたちの特異性として論じていくこともできるかもしれない。彼らの発達論として行為系の視点から表現と世界認識の問題を発達初期から原初的、発生的に論じていくことは研究としてもっと考えてよいことではないだろうか。

意識や情動や発達に関してはヴィゴツキーが提起したことを子どもの遊びを通してもう一度精緻化し直すことができる。私は発達の生成の瞬間に意味を見出したい。これが現在の筆者の研究課題の一つである。

5．個別性と具体性の発達研究をめざして

清水眞砂子（2006）は人の名前は最小の短い歴史であると言う。名付けるという行為は物語ることだがらである。そこには個人の具体へのこだわりがある。あるいは詩人の石原吉郎はかって「確認されない死のなかで」（1980）という短い文で、一人ひとりの死が確認されないことの恐ろしさ、非人間性を告発した。大量殺戮や無名戦士というものがそれである。石原は言う。「死においてただ数であるとき、それは絶望そのものである。人は死において、ひとりひとりその名を呼ばれなければならないものだ。」何故人は己の名にこだわるか。それがまさしく一個の符号であり、単なる番号における連続性をはっきりと拒んでいるからだと言う。

人間精神をどこまで具体のレベルで問うことができるか、アクチュアルな人間の生を私たちは本当に扱ってきたのだろうか。反省すべきことは多い。臨床的視座で求められているものとはそういうものでなかったのではないか。基礎研究で求められる姿勢も同じだろう。臨床研究と基礎研究の乖離について岡本（2001）は次のように指摘する。今、心のブームである。この中で十分な検討がされないまま「心」という用語が使われ、氾濫していると。他方、基礎学としての発達研究についても発達とは何であるのか、発達についての総合的な理解はどこまで進んでいるのか問うべきだと言う。研究テーマの細分化が進んでいる状態を岡本は憂う。基礎的な発達研究と臨床研究との相互交流が今こそ必要な時期であると言う。

岡本の言うような共同研究も重要かもしれないが、発達や教育についてさまざまな問題が露呈している今の時代であるからこそ、発達の生成の過程や発達の根源にこだわり、また発達の現象と具体性のレベルに限りなく降りて考えようとしたメルロ＝ポンティやヴィゴツキーの思想を発達の基礎理論として位置づけ直していく作業が求められている。

文　献

浅野俊哉　2006　スピノザ　共同性のポリティクス　洛北出版.

Damasio, A,, R. 1996 *Descartes' error: Emotion, reason, and the human brain*. London: Papermac.　田中三彦（訳）　2000　生存する脳　心と脳と身体の神秘　講談社.

Damasio, A., R. 1999 *The feeling of what happens: Body and emotion in the making of consciousness*. Harcourt Brace & Company.　田中三彦（訳）　2003　無意識の脳　自己意識の脳　身体の情動と感情の神秘　講談社.

Damasio, A., R. 2003 *Looking for Spinoza*. Harcourt Brace & Company.　田中三彦（訳）　2005　感じる脳：情動と感情の脳科学　よみがえるスピノザ　ダイヤモンド社.

浜田寿美男　2002　第２部３章：発達心理学の隠れた哲学　渡辺恒夫他（編著）心理学の哲学　北大路書房.

石原吉郎　1980　石原吉郎全集第２巻　花神社.

JA 朝ごはん実行委員会ニュース，ニュースレターNo. 15,2005 年 3 月 17 日.　http://www.asagumi.jp/asagohan/15/15. pdf

James, W. 1904 Does ‘consciousness’ exist ? in *Essays in Radical Empiricism*. 1976 Cambridge, Mass.: Harvard University Press.　伊藤邦武（編訳）　2004　純粋経験の哲学，第１章：「意識」は存在するのか　岩波書店（岩波文庫）.

James, W. 1905 The place of affectional facts in a world of pure experience. in *Essays in Radical Empiricism*. 1976 Cambridge, Mass.: Harvard University Press　伊藤邦武（編訳）　2004　純粋経験の哲学，第５章：純粋経験の世界における感情的事実の位置　岩波書店（岩波文庫）.

河本英夫　2006　システム現象学：オートポイエーシスの第四領域　新曜社.

木村敏　2005　関係としての自己　みすず書房.

木村敏・檜垣立哉　2006　生命と現実：木村敏との対話　河出書房新社.

LeDoux, J. 1996 *The emotional brain: The mysterious underpinnings of emotional life*. New York: Simon & Schuster.　松本元・川村光毅他（訳）　2003　エモーショナル・ブレイン：情動の脳科学　東京大学出版会.

LeDoux, J., 2002 *Synaptic self : How our brains become who we are*. New York: Viking Penguin.　谷垣暁美・森　憲作（訳）シナプスが人格がつくる：脳細胞から自己の総体へ　みすず書房.

Le Guin, U., K. 2004 *The wave in the mind: Talks and essays on the writers, the reader and the imagination*. Boston: Shambhala Publications Inc.　青木由紀子（訳）　2006　ファンタジーと言葉　岩波書店.

Merleau-Ponty, M. 1942 *La structure du comportement*. Paris: Presses, Universitaires de France.　滝浦静雄・木田元（訳）　1964　行動の構造　みすず書房.

Merleau-Ponty, M. 1945 *Phenomenogie de la perception*. Paris: Gallimard.　中山元（訳）　1999　表現としての身体とことば（知覚の現象学・所収）　筑摩書房（ちくま学芸文庫）.

Merleau-Ponty, M. 1960 *Signs*. Paris: Gallimard.　竹内芳郎他（訳）　1969　シーニュ１　みすず書房.

岡本夏木　2001　発達研究の現在 ── 内在的批判と研究空間 ── 日本児童研究所（編）　児童心理学の進歩 2001 年版，金子書房.

清水眞砂子　2006　幸福に驚く力　かもがわ出版.

Stern, D. N. 1985 *The interpersonal world of the infant: A view from psychoanalysis and developmental psychology*. New York : Basic Books.　小此木啓吾他（監訳）　1989・1991　乳児の対人世界，理論編・臨床編　岩崎学術出版社.

竹内敏晴　2007　声が生まれる ── 聞く力・話す力 ── 中央公論新社（中公新書）.

Vygotsky, L. S. 1929/1986 Concrete human psychology. *Psikhologiya*, 1, p 51-64.

ヴィゴツキー，L. S.　1956　柴田義松（訳）　2001　思考と言語（新訳版）　新読書社.

柳田邦男　2006　石に言葉を教える　新潮社.